玄語目（げんごもく）

地冊（ちさつ）　没部（ぼつぶ）

天界の冊（てんかいのさつ）

宇宙（うちゅう）　並びに圖（ならびにず）

方位（ほうい）　並びに圖（ならびにず）

機界の冊（きかいのさつ）

轉持（てんじ）　並びに圖（ならびにず）

形理（けいり）　並びに圖（ならびにず）

鬱浡の活、混淪の立。神に在れば則ち神は變じ天は定る。物に在れば則ち機は動き體は實す。實は虚と偶し、動は靜と偶す。而して靜は實と伴い、動は虚と伴う。故に其の精は通塞して、而して方位を地とす。其の麁は轉持して、而して虚實を物にす。體は、散結して玄界に入り、覆載して文章を具す。性は、色を以て日影を成し、性を以て水燥を成す。經緯なる者は條理の大綱なり。没中は則ち能く剖對し、露中は則ち能く通塞す。通は以て時を爲し、塞は以て處を爲す。是れ乃ち物の宅する所なり。期の路する所なり。時は則ち宙なり。衰衰として移る。處は則ち宇なり。坱坱として住す。住する者も亦た移り、移る者も亦た住す。鬱浡混淪の中に、神は爲し天は成り、宇は容れ宙は率ゆ。宇は容れ物は居り、宙は率い期は從う。期なる者は物の經なり。物なる者は期の緯なり。故に物は其の體を緯に寓し、氣は其の期を經に引く。故に處は物を得て體を託す。時は期を得て神を見す。物なる者は、神と物となり。神は衰衰に爲成し、物は坱坱に散結す。爲成は能く始終を循環す。散結は能く大小を布列す。故に散結の間、大小は竝び立つ。始終の間、長短は競い走る。坱坱に居りて窕せず。以て天地の大を見る。衰衰に從いて窮らず。以て運轉の長を觀る。處は以て中を含む。中なる者は處に幹たる者なり。時は以て今を開く。今なる者は時に活する者なり。故に坱坱は物を容れて、中　能く之を維す。衰衰は期を率いて、今　能く之を運す。而して維する者は能く没し、運する者は能く見る。故に宇容は其の坱坱を露さず。宙率は其の衰衰を見さず。物　立ちて中を認め、時　運して今を見す。既已に物を露すれば、則ち小の小と雖も、猶お破る可きなり。唯、中は則ち破る可からざるなり。破る可からざる者に非ざれば、奚んぞ天地を載せて撓まざるを得ん。既已に頃を刻すれば、則ち短の短と雖も、猶お能く之を剖く。唯、今は則ち剖く可からざるなり。剖く可からざる者に非ざれば、奚んぞ萬露を湊めて遺さざるを得ん。神は用いざる所莫し。故に時期は　各　通じ時は往き期は來る。來る者は將に當らんとす。往く者は既に違す。而して今は則ち將既の會する所なり。物は露せざる所莫し。故に處物は　各　立して、處は容れ

物は居る。居れば則ち之に乘る。容れば則ち之を載す。而して中は則ち乘載の所在なり。故に時に隠見有り。處に露没有り。没處は、則ち萬根の託する所なり。氣を發して給するに疲れず。質を收めて容るるに充たず。見時は、則ち衆神の遊ぶ所なり。來るを迎えて當るに遺さず。往くを送りて違うに停らず。故に時は神物に路す。而して今は當遇の天を爲す。

塞がる者は、通に待たざる能わず。通ずる者は、塞に偶せざる能わず。塞がる者は維して住す。故に通ずる者は當りて移る。通ずる者は進みて率ゆ。故に塞がる者は追いて從う。是を以て塞がる者は直ちに通じ、通ずる者は直ちに塞がる。故に一塞中に住移有り。一通中に率從有り。從がう者は、氣の來る有り。率いる者は、氣の往く有り。氣は來を以て生し、往を以て化す。故に塞氣　來るを以て常に活するは、神の爲なり。通氣の往くを以て常に通ずるは、天の成なり。來る者は能く去り、往く者は能く住す。故に坱坱の間は、往住せざる莫し。衰衰の中は、來去せざる莫し。往く者は來る者に當りて往き、來る者は往く者に遇いて去る。當遇の會。時は則ち今を爲し、事は則ち命を成す。今の既に過ぎたるを前と曰い、今の未だ及ばざるを後と曰う。送迎の囿する所を除けば、則ち均しく今なり。神機は來るに活す。天跡は往くに成る。故に、今を以て前後を觀れば、猶お中に居りて左右を觀るがごとし。精は窺い難く、麁は知り易し。是を以て、縱い神の來る有るとも、而も物の往く無く、物の往く有るとも、而も神の來る無くんば、則ち何を以てか當遇の今を得ん。天地は今を得て見れ、事物は今を得て成る。故に機跡は始終を見し、而して時處は無窮を成す。性は物外に立たず。物は性外に成らず。處は神物に宅し、而して中は乘載の地を爲す。今なる者は、往くを送り來るを迎え、將にせんとする者を前にし、既にする者を後にす。

時なる者は、彼此相い向う。彼の前とする所は、我の後とする所にして、而して我の前とする所は、彼の後とする所なり。是の故に、往く者は將にせんとするに向いて既にするに背き、來る者は將にせんとするを離れて既に

するに就く。地なる者は、彼此相い背く。午の上とする所は、子の下とする所にして、而して午なる者は午を上にして子を下にし、子なる者は子を上にして午を下にす。其の事は則ち反す。其の理は則ち同じ。故に來る者よりして之を謂えば、則ち既往を前にして、而して將來を後にす。往く者よりして之を謂えば、則ち率いて往く所を前にして、而して遇いて去る所の者を後にす。

故に來る者は迎うを見て去り、往く者は送るを見て伴う。來りて將に去らんとするの頃にして見る。將來既去なる者は則ち隱る。故に生する者は將にせんとするに居り、化する者は既にするに去る。

通に非ざる者莫ければ、則ち往くとして生化に非ざる莫し。往くとして生化に非ざる者莫しと雖も、而も精麁没露は物を異にす。則ち其の跡は　各　同じからざるなり。故に期の有る者は、生化に跡有り。期の無き者は、生化に跡無し。故に將に生ぜんとすれば則ち來りて化に向う。既にするに化すれば則ち去りて生を遠ざかる。既に生ずれば則ち起りて往くに從い、化を爲せば則ち及ばずして息す。故に物に中外有り。期に始終有り。既に生ずる者は、則ち送るを見て伴う。伴ないて及ばず。以て其の化を觀る。始は既に在り。終は將に在り。將に生ぜんとする者は、則ち迎うを見て來る。來りて停まらず。以て其の化を觀る。始は將に居り、終は既に當る。

中なる者は氣を吐き質を噏う。虚に遠く實に近し。故に氣は吐を見て發し、質は噏を見て收む。吐に遠く噏に近きの地にして没す。之を吐し之を噏する者は則ち露す。故に解る者は外に遊び、結ぶ者は中に依る。夫れ處なる者は物を容れ、物は處に居る。時なる者は期を率い、期は時に從う。故に處と時と經緯を偶す。物と期と經緯を偶す。故に今は能く事を見すと雖も、而れども諸を物に立てざれば、則ち將た奚んか爲さん。處は能く物を露すと雖も、而も諸を期に移さざれば、則ち將た奚んか成らん。期は物に因りて事を成す。物は期に因りて功を畢う。

處なる者は坱然たり。物にして後、紀する所有り。時なる者は袞焉たり。期にして後、紀する所有り。其の物は則ち天地なり。天に規矩有り。東西南北を成す。地に拗突有り。湖海山野を成す。時なる者は時氣なり。期に往

來有り。緩急盈縮を見す。時に會違有り。明暗寒熱を示す。故に湖海山野は、東西南北に依りて方處を紀す。明暗寒熱は、緩急盈縮に依りて節序を成す。天地は物を成し、節序は期を成す。是に於てか、物は事を成し、期は功を畢う。

衰衰は窮まらず。期は則ち始終す。始終なる者にして、而も長有り短有り。坱坱は無垠なり。物は則ち天地す。天地なる者にして、而も大有り小有り。大物は坱坱に居りて窕せず。故に其の物を爲すや大なり。而して小物は天地を分ちて竝び居る。故に其の物を爲すや小なり。長期は衰衰に從いて已まず。故に其の期を爲すや長なり。而して短期は歳月を追いて及ばず。故に其の期を爲すや短なり。而して大小長短。亦た自から統散有り。統中、則ち天は大にして、而して地は小に、轉は長にして運は短なり。散中、則ち天地は大にして、而して萬物は小に、運轉は長にして衆期は短なり。夫れ人は一小物を以て、短期を得る。彈丸の如く實結する者を得て之を踏む。瑠璃の若く清虛する者を見て之を仰ぐ。明暗は相い換り、寒暑の相い推す者を時にして之を經る。乾潤は相い生じ、動止の相い立つ者を侶にして之に依る。我の麁體を以て、而して物の麁露を認む。故に日月山海は、我の天地なり。

天は瑠璃の若く、地は彈丸の若くなるに由りて之を觀れば、覆う者は天を爲し、載せる者は地を爲す。然りと雖も、天なる者は、氣の名にして、而して地なる者は物の名なり。故に處を以て時に對すれば、則ち時なる者は氣なり。天と爲る。處なる者は物なり。地と爲る。同じく此れ處なり。或いは天と呼び、或いは地と呼ぶ。猶お是れ此の一身を、父に對して子と呼び、子に對して父と呼ぶがごとし。各 會する所有るなり。故に瑠璃の如き天と彈丸の如き地は、則ち天地を物中に開きて有り。次第に相い開く。則ち天地は愈いよ有り。而して氣物は愈いよ瑣なり。

晝夜冬夏は、我の期紀なり。水燥の中に於て絪縕し、動植の物に於て相い依る。天地は坱坱に物して、而して萬物は其の中に竝び立ち、歳月は衰衰に期して、而して衆期は其の間に競い走る。時は處に時し、處は時に處す。期は

物に期し、物は期に物す。蓋し宇宙は精を以て没し、天地は麁を以て露す。天は動止の機を畜え、地は虚實の體を有す。天は虚と雖も而も動を以て其の體を剛にす。何ぞ地の實を以て其の體を堅くするに異ならん。故に麁露の天地は、堅ならざれば則ち剛なり。故に地の物を立つると、天の物を浮ぶると、堅剛は同一なり。剛處は、日影の象之を占め、堅處は、水燥の物　之を占む。是に於て、象質は天地を隔てて居り、歳運は轉持を分ちて行く。象と質と　各　其の氣を得て配す。氣象は時節を紀すの物を爲し、氣質は生化を爲すの物を爲す。故に虚動は、經具なり。實靜は、緯具なり。實靜は天地を成して、而して虚動は轉持を成す。轉中は、則ち萬象運轉す。期は往復循環に在り。持中は、則ち萬質相い換る。期は生化鱗比に在り。故に轉物は常に一體を持し、持物は毎に其の體を換う。

大物は小物を容れ、有窮は無窮に居る。小物なる者は有窮なり。體體　相い換る。引きて之を無窮に致す。大物なる者は無窮なり。其の體を常に持し、生化一體なり。生化一體なる者は、生化すと雖も、而も其の跡を露せず。故に無窮と曰う。體體相い換る者は、亦た無窮を致すと雖も、前體は後體に非ざるを以て、生化の跡は顯かなり。故に有窮と曰う。前體は後體と一なれば、則ち生化は其の中に行わる。而して其の物は無窮の若し。前體は後體と別なれば、則ち彼は化し此は生す。而して其の物は有窮の若し。無窮なる者は、終りて始まる。有窮なる者は、始まりて終る。其の道を同せずと雖も、而れども生化の通に於ては、則ち一なり。人なる者は、麁物なり。小體なり。身は畫する所有り。生は盡きる所有り。盡きること有るの生を以て、畫する所の身を有す。混成を以て、其の智は囿する所有り。麁小を以て精大を推す。大物に窒す。長期に眩む。

蓋し萬物は大物に居り、衆期は長期に從う。地は塊焉たる一圓物なり。故に下は能く上を爲し、西は能く東を爲す。時は氣を以て通じ、處は體を以て塞る。塞中、天は動き地は靜まる。通中、事は移り物は住す。住する者は止に定まり、移る者は行に通ずる。中なる者は、止の主なり。物は之に居り、位は之に立つ。今なる者は、移の主なり。事は此に行わる。物は此に換る。事は此に行わる。物は此に換わる。中は、立ちて移らず。今は、移りて居

らず。立つ者は、中外に位有り。移る者は、來去に方無し。氣質は坱中に物し、氣象は袞中に跡す。氣質は物ならざれば、則ち焉んぞ處を露するを得ん。氣象は跡ならざれば、則ち焉んぞ時を紀するを得ん。氣は西し象は東す。動を以て時の紀を成す。天は外し地は中す。靜を以て處の位を立つ。坱坱の立、中は破る可からずして、而して外は邊無し。體は一なりと雖も、而も一面一背の二用有り。袞袞の移にては、今は剖く可からず。而して時は界無し。行は一なりと雖も、而も一往一來の二跡有り。圓中は一心を點して、外は際涯無し。直中は一頃を見して、外は前後を隠す。中や、南に中し、北に中し、西に中し、東に中し、無際涯に中して、而して能く移動する者を維す。今や、前に今し、後に今す。去るを積みて後を厚くせず。來るを奪いて前を薄くせず。而して能く靜立する者を移す。

時は、悠焉たる一直氣なり。前を轉じて後と爲し、生を收めて化と爲す。

彼の水車を觀るに。一邊は水を載せ　仰ぎて來る。一邊は水を瀉し、俯して往く。水車は有體の往來なり。然れども猶お且つ端を見ず。前後なる者は、無象の往來なり。孰れか逆えて其の首を見ん。孰れか將って其の尾を見ん。蓋し時なる者は、往來を以って前後と爲す者なり。期なる者は、生化に由りて始終を爲す者なり。時に往來有り。物は當りて前後を分つ。期に始終有り。時は移りて新故を成す。是を以て天地に前後有り。萬物に新故有り。人は始終新舊の質を以て、駸駸たる者を追う。是に於て、將迎の間、智の畫する所有り。以て疑いを天地に爲す。今を以て故を觀れば、則ち鴻濛たり。後を以て今を觀れば、則ち今は胡ぞ鴻濛たらざらんや。既往將來は、典籍の傳る所、事跡の推す所を除きて、而して智の至らざる所なり。四方上下は、見聞の及ぶ所、思慮の至る所を除きて、而して智の至らざる所なり。塞がる所に於て、而して強いて之を通ぜんと欲す。故に其の知る所は愈いよ廣くして、而して其の知らざる所は愈いよ遠し。其の知る所は愈いよ皦にして、而して其の知らざる所は愈いよ曹し。混混たる者をして粲粲たらしめんと欲し、粲粲たる者をして混混たらしめんと欲す。理を誣るに非ざ

れば、則ち自から蔽うなり。過ぐれば則ち後なり。及ばざれば則ち前なり。天は此の間に往來す。物は此の間に生化す。知運感應の爲す所、當遇會違の成る所、人に於ては、則ち治亂興廢、酬醋黜陟、皆な此に於てす。我は此に生化し、自から此に起滅す。智は、無際の有際を容れ、有窮の無窮に通ずるを知らず。此の無窮を有窮に於て窮めんとするは、難し。

萬物は成壞し、給資を用うる有り。衆期は始終し、旺衰を爲る有り。循環する者は氣象なり。鱗比する者は氣質なり。循環する者は、各期　相い定まる。故に之を推すに、會違は數を出でざるなり。鱗比する者は、各期　定まる無し。故に之に從うに、變化は豫す可からざるなり。

氣象は運轉し、天を周り地を周る。其の機は違わず、參差の中に整齋す。日を爲し年を爲し、章を爲し紀を爲す者は、歳なり。象質は升降し、天を行き地を立つ。其の機は定らず。整齋の中に參差す。風雷雲雨、木壽豊倹なる者は、運なり。

是を以て循環する者は精なり。周周は端無きなり。生化は相い接し、始終は相い依る。鱗比する者は麁なり。一過して跡を顯にす。起滅は始終を爲し、旺衰は新故を爲して、而して生化の天地に通ずるに於ては、則ち隔てざるなり。故に各體は竝び立ちて、衆期は相い追う。各體を大體に比するに、大體は無垠なり。人は數を立てて、而して后に物體の廣狹小大を比方す。衆期を長期に比するに、長期は無際なり。人は數を立てて、而して後に經歴の久近長短を比方す。

人は已に立つ所有りて、彼の循環鱗比を觀る。循環は定度常期有れば、則ち各行を計えて而して會離を定めんと欲す。曆の起こる所なり。鱗比は定度常期無ければ、則ち歳月を係けて而して長短を比べんと欲す。壽の用うる所なり。天に長短の各期有り。人は奇偶の數を設け、乘除して之を計う。物に參差の變化有り。人は書數の技を設け、連綿として之を記す。蓋し天なる者は測る可からず。人巧は接物の方を窮めんと欲す。故に衡を立てて輕

重を辨じ、量を立てて多少を知り、度を立てて長短を測り、漏を立てて久近を分つは、人の設なり。蓋し處なる者は、天動地止の處なり。虚なる者は遠く浮き、實する者は近くに沈む。遠浮近沈は共に露して、而して立つ者は能く容れ能く載す。而して載の微は、此の廣大を露す。時なる者は、神爲天成の時なり。前なる者は將に來らんとす。後なる者は引て去らんとす。將來引去は共に隠れて、而して當る者は、随いて見れ、随いて隠る。而して當の忽は、此の攸久を成す。物は、中を守りて立ち、外に向いて通ず。神は、今に當りて活し、後に向いて息す。物は通じて體を失う。神は息して跡を留む。跡を留めて神は息す。機を發して神は活す。統散して　各　神を有す。而して小は則ち大に資る。故に機は發して絶えず。之を生生と謂う。跡は收めて已まず。之を化化と謂う。循環する者は、往復して期を爲す。始まる者は終る。終る者は始まる。鱗比する者は、生死して期を爲す。死する者は息す。生する者は繼ぐ。天物は體を長存し、地物は體を毎換す。存換は同じからずと雖も、彼此は同じく通中に生化す。故に體を存する者に於ては、則ち歳と曰い、暦と曰う。體を換うる者に於ては、則ち殤と爲し、壽と爲す。蓋し一なり。故に循環する者に於ては、漏を置きて時を刻す。日の一周地の頃を一百と爲す。月は天を周る。日は天を周る。東西兩線の相い旋るは、頃を此に資る。故に會離の紀は、亦た此に成る。鱗比する者に於ては、則ち歳を定め日を定む。日の一周天の頃を歳と爲す。歳中は明暗を會し、月を置き日を置く。長短夭壽の經歴は、此に於て資る。故に今、循環する者を、人の資る所に就きて之を言えば、則ち日の一周地は一百刻、月の一周地は一百三刻、日の一周天は三萬六千五百二十三刻にして贏る。月の一周天は二千七百五十五刻にして贏る。天の成る所を以て之を言えば、各各一期にして、期は定まるに由りて、推す所を逃れず。鱗比する者は、人の資る所に就きて之を言えば、長壽は千萬歳にして、短期は夕を崇めず。或いは數十歳、或いは十數日なり。天の成る所を以て之を言えば、各各一期、歳月の定期に比す。此の長短を察するを得る。故に奇偶を相い畳ぬるに十を紀し百を紀す。皆な天の數に非ざるなり。

蓋し天地は大にして全なり。萬物は散にして小なり。全なれば則ち神本は力　敵す。敵すれば則ち持す。持すれば則ち久し。散ずれば則ち神本は力　偏す。偏すれば則ち傾く。傾むけば則ち顚る。衆期の壽を天地に於て爭うこと能わざる所なり。

天地なる者は物を以て成り、象質なる者は性を以て成る。象なる者は色を爲して見れ、質なる者は性を爲して露す。故に日月景影は、色を虛中に於て見し、水火溼燥は、性を實中に於て示す。天地会易の物立ちて、星辰は上に散じ、動植は下に聚る。而して星辰は循環の物なり。動植は鱗比の物なり。循環する者は其の期　攸久なり。鱗比する者は其の期　斯須なり。鱗比の中にも亦た神本に長短有り。本氣に富める者にして、而して能く久し。本氣に乏しき者にして、而して能く短なり。神氣に富める者にして、而して能く變化す。神氣に乏しき者にして、而して變化に拙し。其の錯綜に至りては、則ち實物攸久と雖も、而も鹵輭は動植と壽を爭うこと能わず。雲雨倏忽と雖も、而も朝菌蜉蝣は旦夕を持せず。夫れ地は止り天は行く。天は令し地は奉ず。是に於て天は日月を率いて明暗照蔽す。地は從い天は行きて寒熱肅舒す。人は其の事を紀して曆と曰う。乃ち晦望會離、晝夜冬夏の事なり。時は移りて物は換り、人は運し事は變ず。是に於て、萬物變動の事、人世換革の態は、其の事を紀して史と曰う。乃ち日月山河、人物鳥獸の事なり。是を以て各周、各轉、各期を爲す者は、天の曆なり。各周を相い比し、其の久近を方べ、止地に立ちて轉天を觀、規矩を建てて會違を正す者は、人の曆なり。